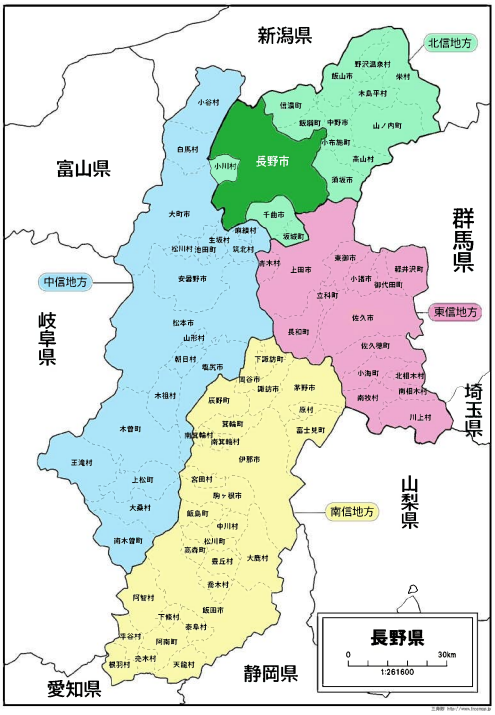
・第１章　長野市の概要

１　自然的・地理的環境

(1)位置

長野市は、日本のほぼ中央にある長野県の北部に位置する。東西 36.5km、南北 41.7km、面積は 834.85 ㎢。標高の最高地点は、新潟(にいがた)県境に位置する高妻山(たかつまやま)の 2352.8m、最低地点は市の北東部に位置する千曲川(ちくまがわ)下流端の 327.4mで、標高差は 2025.4mである。



長野市の位置図

(2)地形

長野市は、中央の長野盆地とその東西にある山地からなる。北西部は標高 2,000m を超える急峻(きゅうしゅん)な戸隠連峰(とがくしれんぽう)、標高 1,200m以下の地すべりの多い比較的なだらかな山地があり、その山地を刻む裾花川(すそばながわ)や土尻川(どじりがわ)が東へ流れ、犀川(さいがわ)に合流する。犀川は、市の西側からほぼ東に向かって山地の中を蛇行しながら流れ、盆地内に流入後は大規模な扇状地を形成し、やがて千曲川に合流する。千曲川は市内を南西から北東方向に流れる。千曲川・犀川・裾花川が集合する盆地は善光寺平(ぜんこうじだいら)と呼ばれ、河川が運んだ土砂が平地をつくる。

(3)地質

長野市は、地形的に中央の長野盆地とその東西にある西部山地と東部山地に大別される。

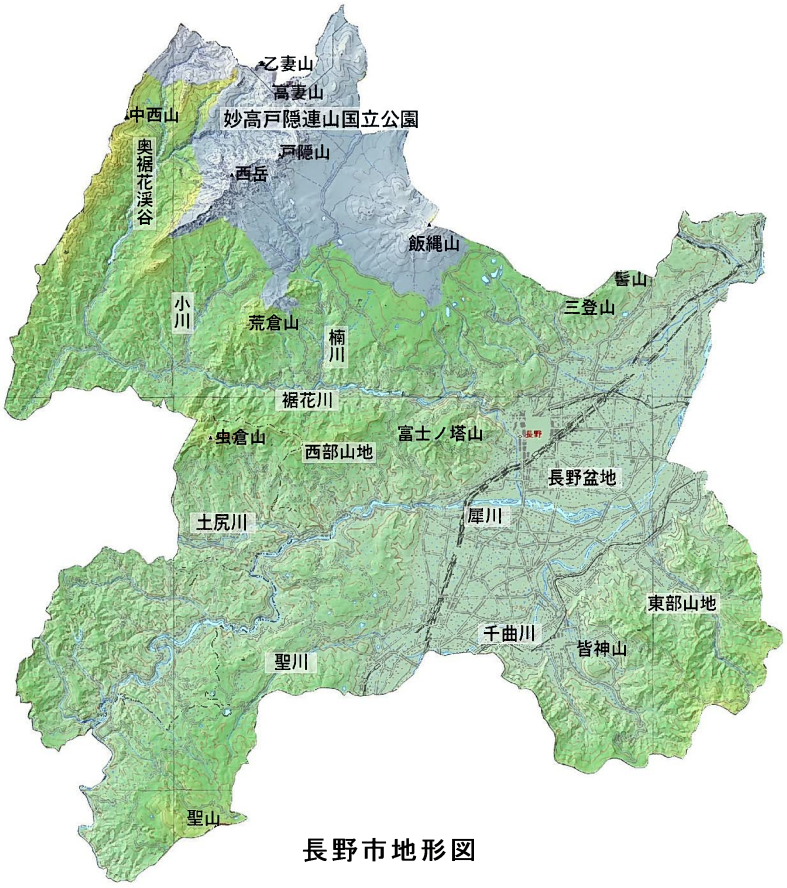
この一帯は北部フォッサマグナ地域に含まれ、その海だった場所に堆積した新第三紀層が山地を構成している。西部山地の北には第四紀火山である飯縄山(いいづなやま)が位置し、その山体や山麓は火山噴出物で構成される。長野盆地の周辺にある皆神山(みなかみやま)や髻山(もとどりやま)なども第四紀に噴火した小規模火山である。中央部にある長野盆地は、第四紀の中ごろから長野盆地西縁断層の活動が活発化して落ち込んだ部分で、そこに千曲川や犀川・裾花川等が運んだ河川性ないしは湖沼性の堆積物が、深いところでは 1,000m 以上も堆積している。

東部山地は、西部山地より古い約 2,000 万年前から 1,000 万年前の地層から構成されている。海底火山の噴出物や深い海に堆積した泥岩層などからなる。約 1,000 万年前に、地下からマグマが入り込み、硬い岩石(石英閃緑岩類(せきえいせんりょくがんるい))ができた。この石英閃緑

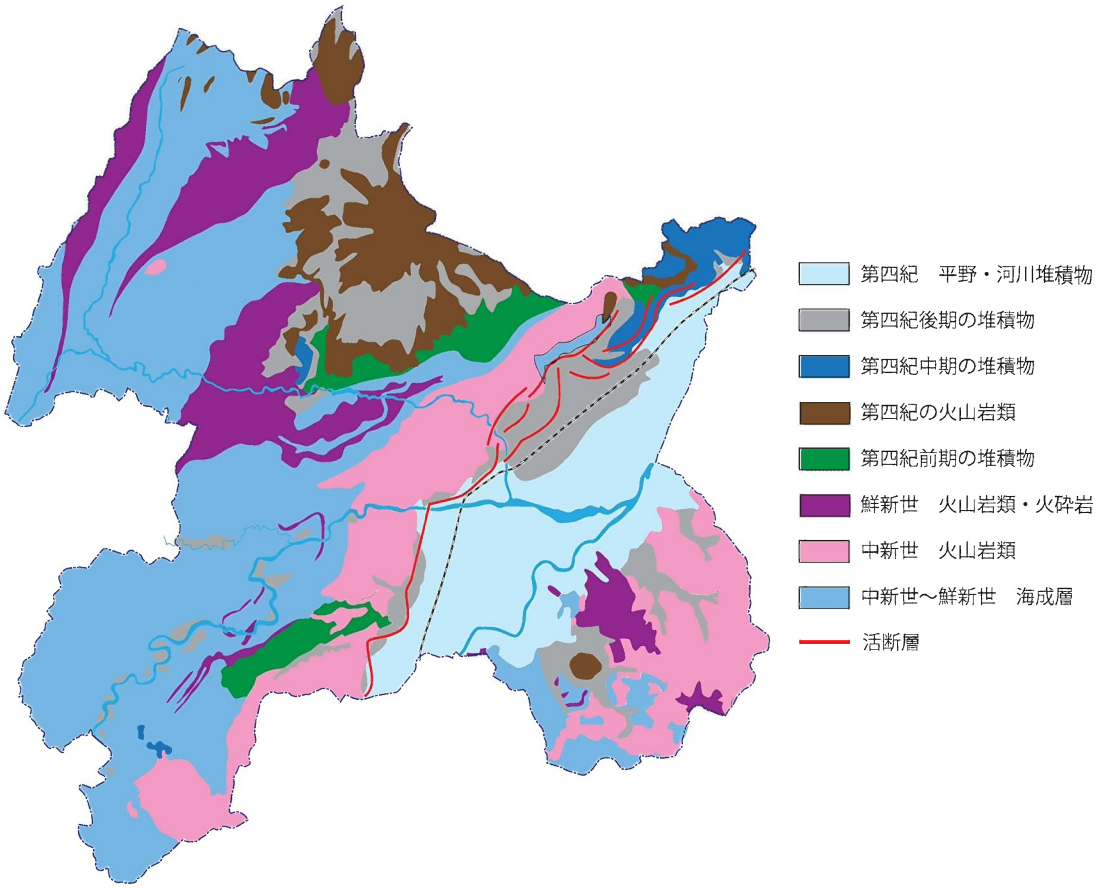
岩類の持つ熱が、現在の温泉の熱源ともなっている。東部山地の硬い地層や岩石は、大室古墳群の石室や松代城の石垣に使われ、松代大本営の立地条件ともなった。この山地の北部には、四阿山から志賀高原にかけての第四紀火山が噴出した。

西部山地は、約 1,000 万年前から 200 万年前にかけて海底に堆積した泥・砂・礫などの地層や海底火山の噴出物である溶岩や凝灰角礫岩類が分布する。西部山地は、現在も隆起を続ける地域で、溶岩や凝灰角礫岩類でできた戸隠連峰や虫倉山系、富士ノ塔山から三登山にかけては、険しい山地をつくる。これらの海成層からは、日本の石油産業の発祥の地ともなった浅川産の石油や、海生の貝類をはじめ各種の化石を産出する。また、雪の多い戸隠連峰から流下する裾花川は水量が多く、この地域が隆起を続けていることもあって浸食が進み、地層が連続して露出している。地層の積み重なりや化石の産出状況、各種の堆積構造、風化・浸食でできた地形を学ぶことができる。

長野盆地の西縁部には活断層帯があり、西部山地の隆起と長野盆地の沈降をもたらしている。この活断層は善光寺地震の震源ともなった。長野盆地西縁部の丘陵には、断層の動きで長野盆地が湖となったことを示す豊野層も分布する。断層の動きによって隆起した台地に河川が流入し、浸食作用により形成された段丘崖は、その後犀川や裾花川が運ぶ土砂によって高低差が埋まり、扇状地となった。この扇状地の扇央部に善光寺が立地し、その南側には門前町が栄え、中心市街地に発展した。長野盆地の沈降は今も続いており、河川が流れ込み氾濫原を形成している。この河川の運んだ土砂の自然堤防の部分が「島」と呼ばれる微高地になっており、集落が形成された。



長野市地形図

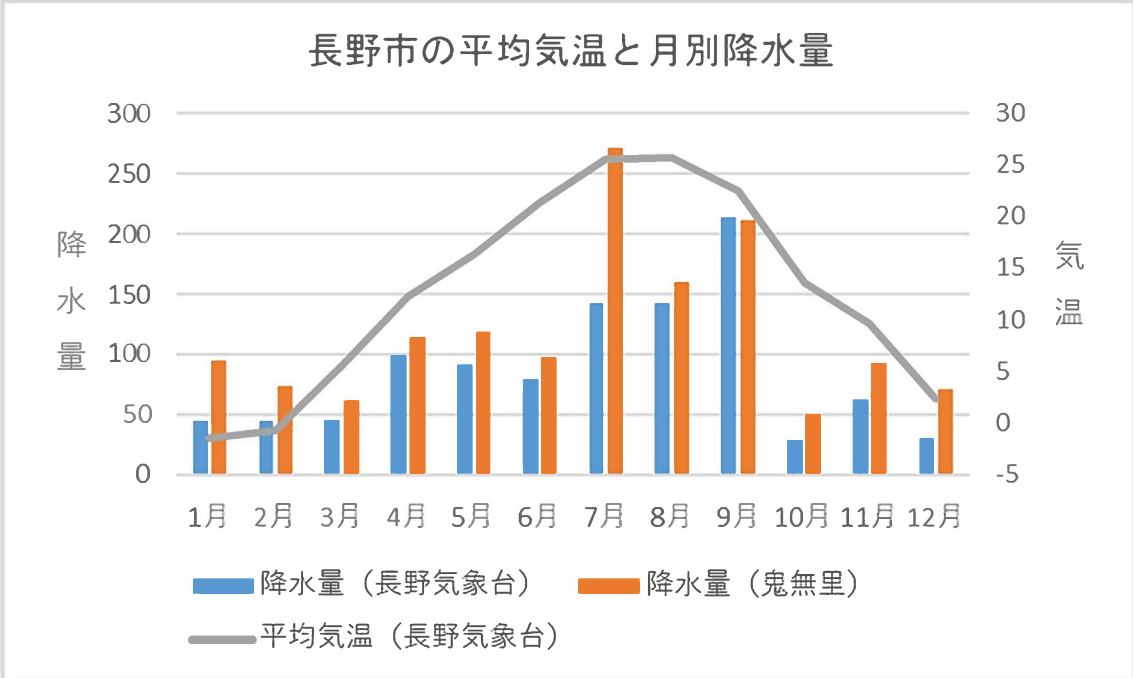


長野市地質図

(4)気候

本市は周囲を山地に囲まれる盆地であると同時に西部山地を構成する戸隠連峰や飯縄山などが日本海からの北西の季節風を遮るため、内陸性気候の特徴が顕著にみられる。気温は年間の寒暖差が大きく、夏期の最高気温は８月で 31℃まで上がり、冬期の最低気温は１月で－4℃以下まで下がる。日較差も年間を通して大きく、特に4月は一日の寒暖の差が 12℃を超える。雨は夏季に多いものの、年間を通して降水量が少ないのが特徴で、2022 年を例にとると長野地方気象台での年間降水量は 1,023 mmで、日本の平均降水量(1,661 mm：1991 年から 2020 年の平年値)をかなり下回る。

一方で市の北西部、戸隠･鬼無里地区の新潟県境付近では降雪が多く、日本海側気候を示す。高妻山をはじめとする高山が連なり、夏季の６月から９月も降水量が多く、鬼無里地区では年間降水量は 1,415 mm(2022 年)に達する。



（5）自然地理

長野市は、市域が広大であるために、地域ごとに異なる自然がみられ、全体として高い多様性をもつ自然となっている。地形的には「山地」、「中山間地・扇状地」、「平地・河原（盆地平坦部）」に分けられる。市内の地形別の自然の特徴は以下のようになる。

山地：飯縄山をはじめとし、西岳（にしだけ）から戸隠山、高妻山、乙妻山（おとつまやま）に至る戸隠連峰、さらに堂津岳（どうつだけ）（小谷村・新潟県妙高市）から中西山（なかにしやま）に至るまでの北安曇郡（きたあずみぐん）との境となる山々とそれらに囲まれた裾花川源流域。これらの山々には、飯縄山や高妻山への登山者のほかは、ほとんど人が入らない。市内でもっとも標高が高く、降雪も多い地域で急峻な地形をなす。多雪地域に適応したトガクシソウなど「トガクシ」が種名につく植物がみられ、多くの新種が確認されてきた。しかし、急峻な地形のため十分な調査が行われてきたとは言えず、今後も新たな発見の可能性がある。広大な自然が残る地域で、貴重な自然遺産と考えられ、妙高戸隠連山国立公園（みょうこうとがくしれんざん）にも指定されている。緑色凝灰岩や石英閃緑岩でできている東部山地は、険しい山地で沢沿いに集落が点在する。江戸時代より人の手が入り、二次林が広がっている。

中山間地から扇状地：市域において最も広い面積を占め、長い年月にわたって人手が加わって成立してきた地域となっている。人間の活動が、適度な攪乱（かくらん）となって多様性の高い自然を形成してきた。コナラやカスミザクラなどを主とした落葉広葉樹林やアカマツ林など人手の加わった二次林が分布し、そこに水田や畑地、草地、集落などがモザイク状に入り組んでいる。さらに、地質・地形的な特徴や河川が分布境界となって、市内の各地域で動植物の違いがみられる。この地域では、地すべり地で生じる湧水や緩斜面を利用し、棚田がつくられてきた。また、降水量が少ないこともあって各地でため池が築造

されてきた。

平地・河原（盆地平坦部）：千曲川は、長野盆地に入ると河川勾配が緩やかとなり蛇行する。瀬・淵・ワンド・たまりなど多様な環境があり、そこに特有な動植物が生息する。犀川は西部山地から長野盆地に入ると大きな扇状地を形成し、砂礫がつくる河原となっている。安茂里地区におけるコムラサキの集団ねぐらやコアジサシなどの礫河原に営巣する鳥類にとって、重要な生息地域となっている。また、水辺環境として、かつての千曲川が蛇行していた跡（河跡湖）の松代地区の金井池、冬季にカモ類などが渡ってくる吉田地区の辰巳池などのため池、さらに長野市街地を東流する、ホタルの生息する八幡川などの水辺環境があり、いずれも市街地のオアシスとして貴重な存在になっている。

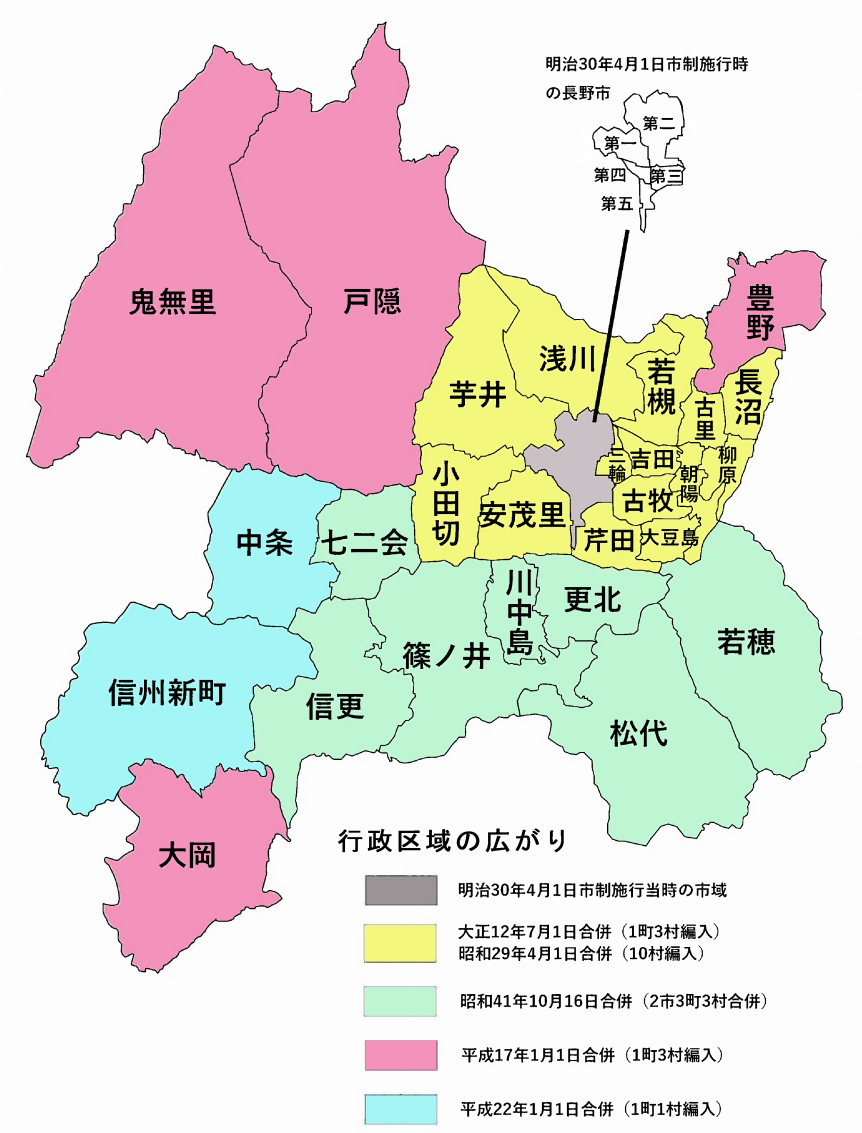
2　社会的状況

（１）町村合併の歴史

明治７(1874)年、善光寺と門前町の範囲に限られていた長野村は市街化に伴い、長野町と改称する。翌年北隣の箱清水村と合併しその範囲を広げた。明治22(1889)年に町村制が施行されると、長野町は近隣の南長野町、西長野町、鶴賀町、茂菅村と合併し、新しい長野町となった。この時に合併した５町村の範囲がほぼ現在の第一地区から第五地区にあたる。（第一地区は西長野町・茂菅村・長野町の一部、第二地区は長野町・箱清水村・三輪村の一部、第三地区は長野町の一部・鶴賀町・三輪村の一部、第四地区は南長野町、第五地区は南長野町の一部と芹田村の一部に相当する。）その後、明治 30(1897)年には市制を施行し長野市が成立した。

長野市はその後、大正 12(1923)年に近隣の三輪村、芹田村、吉田町、古牧村の１町３村を編入合併、昭和 29(1954)年には古里村、長沼村、柳原村、朝陽村、大豆島村、安茂里村、小田切村、芋井村、浅川村、若槻村の周辺 10 村を編入合併し市域を大きく広げた。さらに昭和 41(1966)年に長野市と篠ノ井市、松代町、川中島町、若穂町、更北村、信更村、七二会村の２市３町３村が合併し、新長野市が誕生した。

平成に入り国が打ち出した「平成の市町村合併」により、平成 17(2005)年に豊野町、戸隠村、鬼無里村、大岡村の１町３村が、平成 22(2010)年に信州新町と中条村が長野市に編入合併し、現在の長野市となった。市域の行政区は合併の際の市町村が単位となっており、現在 32 地区となっている。

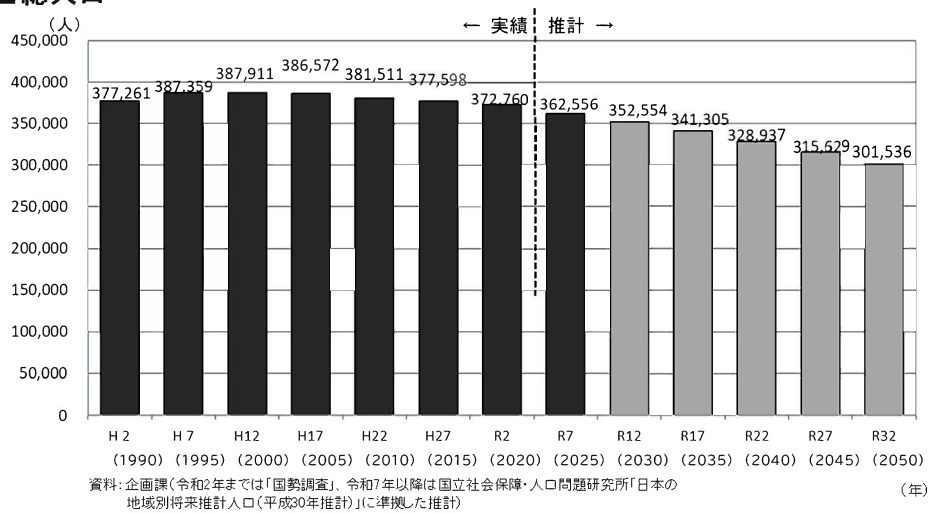


（２）人口動態

ア 人口

令和 6（2024）年 1 月時点で人口が 365,505 人の長野市の人口のピークは、平成 12(2000)年の 387,911 人で、それ以降は減少に転じている。今後も人口が徐々に減少していくとともに、平成 17(2005)年、平成 22(2010)年に合併した市町村を含めた周辺地域の人口減少と、その受け皿となる長野市街地への人口流入が続いていくと予想される。また県外（特に東京方面）への人口移動が傾向として見られる。今後もこの傾向は続くと考えられ、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると令和 27（2045）年の本市の人口は 315,629 人となり、今後 20 年間で 5 万人以上が減少すると見込まれている。

■総人口

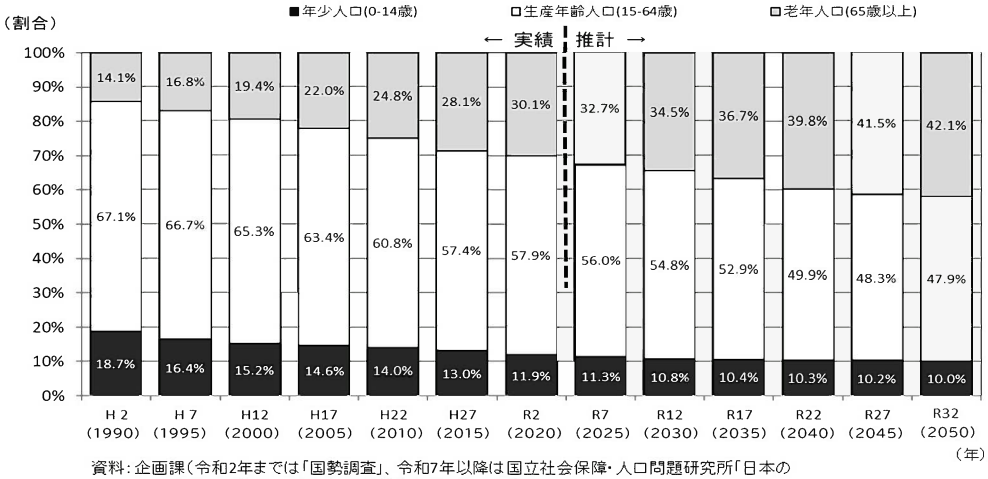


資料：企画課（令和2年までは「国勢調査」、令和7年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」に準拠した推計）

イ 年齢区分別人口

年齢構成をみると、年少人口、生産年齢人口の割合が減少する一方、老年人口は増加傾向にあり、少子高齢化が進行している。平成 22(2010)年の老年人口の割合は 24.8%であったが、令和２(2020)年には 30.1%となり、10 年間で 5.3%増加している。今後もこの傾向は続くと予想される。令和 6（2024）年 1 月時点で老年人口の割合はさらに増え 30.7%であるが、国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、20 年後の令和 27（2045）年の老年人口は 41.5%と、人口の半数に迫る勢いとなっている。

■年齢3区別人口

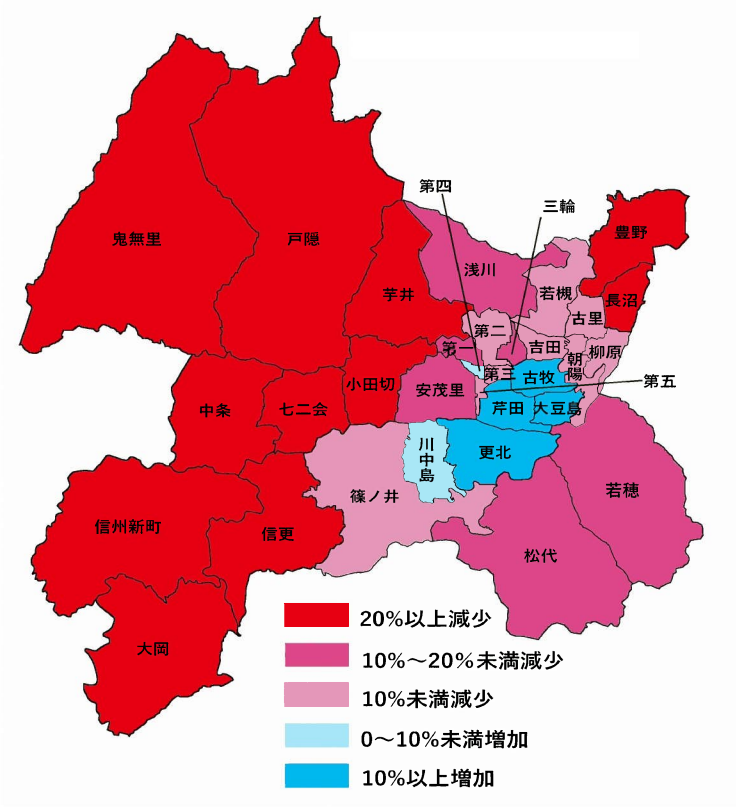


資料：企画課（令和2年までは「国勢調査」、令和7年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」に準拠した推計）
注：実際には、年齢不詳が含まれていないため、3区分の合計が必ずしも100%にならない。

ウ 地区別人口

地区別人口では令和５(2023)年４月時点で、篠ノ井の人口が最も多く、以下更北、長野（第一から第五地区）、川中島、芹田、古牧と続き、市域の平坦部に

人口が集中している。逆に人口が少ないのは大岡、小田切、鬼無里、中条、芋井、信更といった盆地周辺の中山間地域となっている。町村合併で現在の長野市となった平成 22(2010)年から令和５(2023)年までの地区別人口の増減率は、長野も含めてほとんどが減少しているが、特に中山間地域にその傾向が強くみられる。

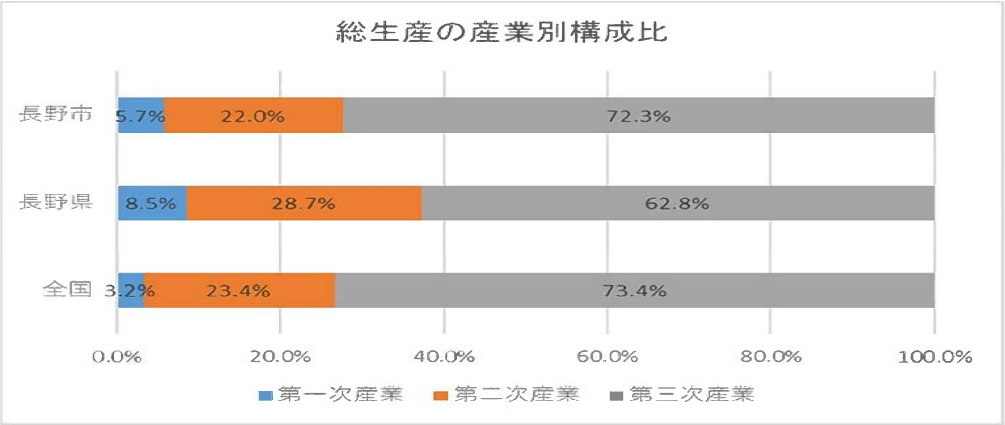


2010 年～2023 年の人口動態

（３）産業

ア 産業別の状況

第一次産業の農業に従事する戸数は減少傾向にあるが、そのなかでりんご・もも・ぶどうといった果樹は盛んに生産されている。りんごは全国２位の作付面積を有する長野県のなかで第１位の作付面積を誇る。ももについても全国３位の作付面積を有する長野県のなかで、県内１位の作付面積を誇り、川中島地区の川中島白桃など、地名を付したブランド品として出荷されている。第二次産業としては、出版・印刷業の企業数が多いのが特徴である。これは明治に県都となって以来、官公庁関係の印刷物の需要や、県民の教育への関心から来る教育関連の印刷物への需要の高まりとともに発展してきたものである。しかし近年ではデジタル化の波で紙離れが進んでいるため状況は厳しくなってきている。そのほか食料品、金属製品製造業、電子デバイス・情報通信機器関連などを中心に発展を続けてきたが、国際的な競争力が求められるにつれ、第三次産業が７割を超える状況に変化している。



資料：令和２年度国勢調査

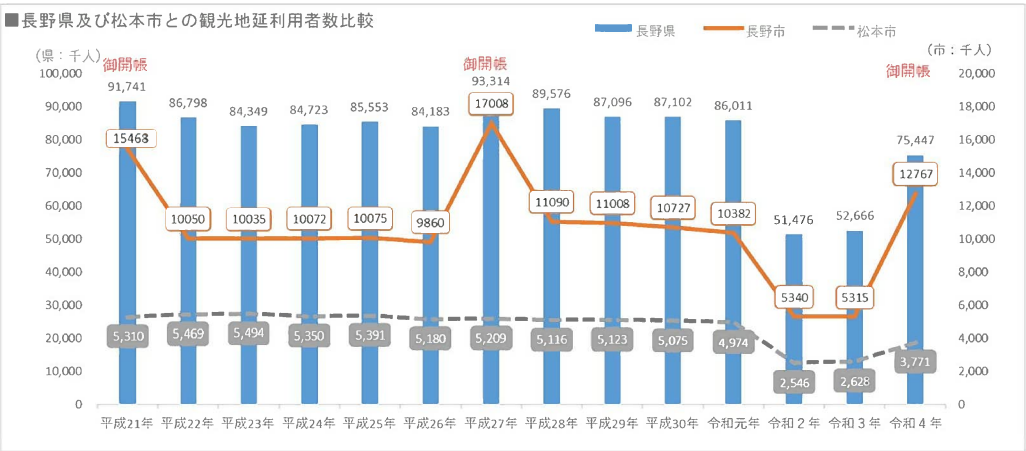
イ 観光

善光寺とその門前町は、古くから信仰の中心として全国の人々に親しまれてきた。現在は周辺に広がる宿坊・仲見世などが市の観光の中心としてにぎわいをみせている。とりわけ、数え年で７年に一度開催される善光寺御開帳（ぜんこうじごかいちょう）の年は、例年に比べて飛躍的に観光客が増加する。

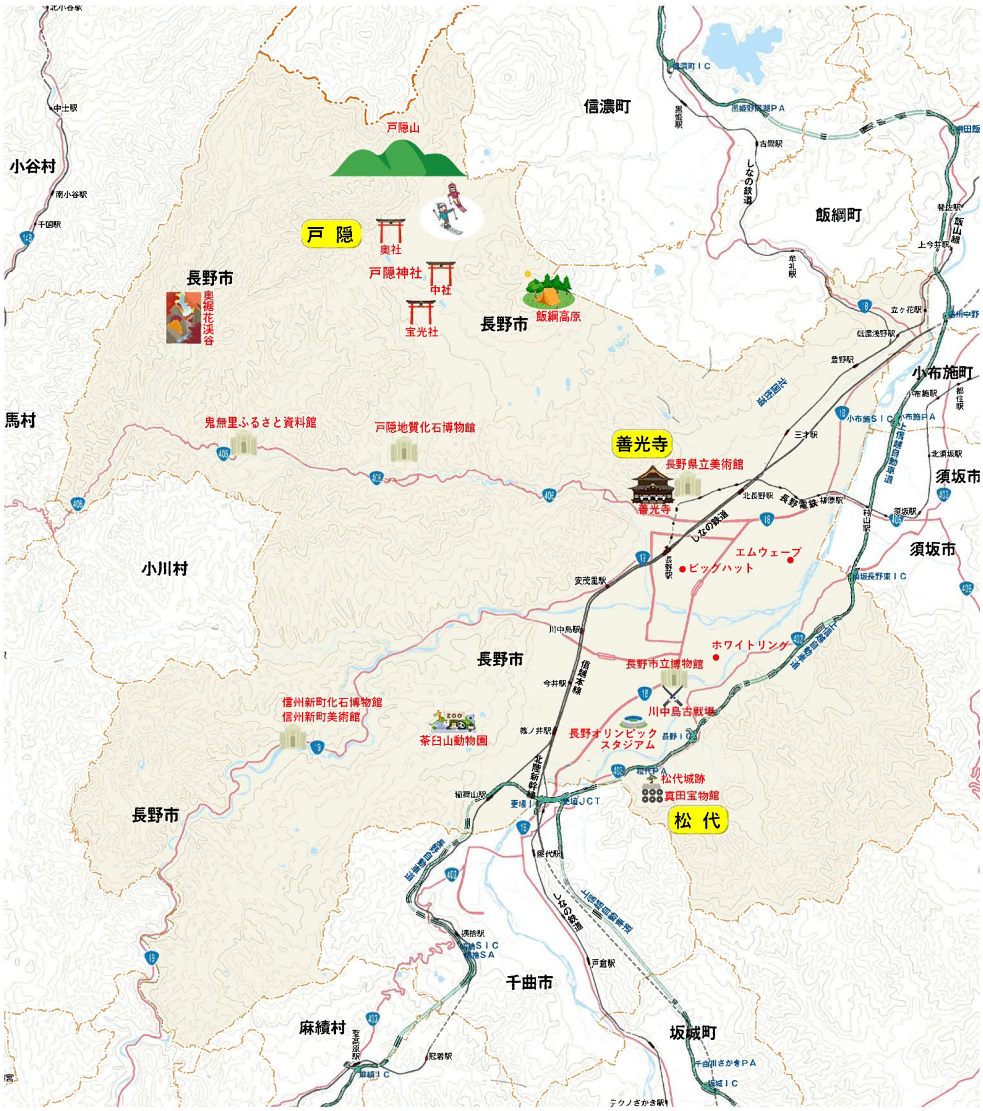
真田十万石（さなだじゅうまんごく）の城下町である松代は、当時の面影を残した歴史的建造物が数多く見られる。これらの地域の観光資源を住民自らが守り育てようと、「エコール・ド・まつしろ」などの取り組みが始まり、現在も様々な団体がそれぞれの活動の中で、訪れる観光客をもてなしている。

戸隠・鬼無里の西部山地地域は、豊かな自然環境の中に、古くから伝わる様々な歴史・文化・芸能があり、秘められた観光資源が残されている。

令和２(2020)年からは、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響をうけ、海外からの渡航や国内の往来にたびたび制限がかかったために、観光地利用者数が落ち込んでいたが、感染が落ち着きを見せた令和４(2022)年以降、利用者数は回復傾向にある。



出典：長野県「観光地利用者統計調査」



市域の主な観光地

ウ 土地利用

都市的土地利用（住宅地、工業用地、店舗等）については、人口減少など社会情勢の変化による中心市街地の空洞化の進行により、空き家や低・未利用地の増加がみられる。農林業的土地利用については、農業の担い手不足による荒廃農地の増加や、木材価格の低迷等に伴う適切施業がされない森林の増加がみられる。

エ 交通

長野市は明治４(1871)年以来、長野県の県庁所在地として発展を遂げ、官庁、金融機関、事業所などの都市機能の集積に伴い、活発な人的交流と情報が集中する中核都市として発展してきた。

善光寺門前に位置する長野市の中心市街地を軸に、道路と鉄道が整備されている。道路は、長野市から名古屋市へ伸びている国道 19 号と、群馬県高崎市と新潟県上越市を結ぶ国道 18 号が交わる交通の結節点となっている。市内東南部松代には、東西に上信越自動車道が走っており、長野ＩＣと市街地は国道 18 号と主要県道によって接続されている。

鉄道は平成９(1997)年 10 月にＪＲ東京駅からＪＲ長野駅間において長野新幹線が開通し、首都圏から訪れる観光客の利便性が向上した。さらに平成27(2015)年には新幹線が金沢駅まで延伸したことで北陸方面からの観光客の利便性が向上した。これに伴い長野新幹線の名称は、北陸新幹線に改められた。令和６(2024) 年３月には福井県の敦賀駅まで延伸したことで今後さらなる観光客の入り込みが想定される。在来線としては飯山市につながるＪＲ飯山線、松本市につながるＪＲ篠ノ井線、軽井沢町につながるしなの鉄道しなの鉄道線、上越市につながるしなの鉄道北しなの線があり、長野市と山ノ内町を結ぶ長野電鉄長野線がある。

市内のバスは長野電鉄が経営する長電バスと、アルピコ交通が経営するバスが運行している。長電バスは長野駅から浅川や若穂に向かう路線や、長野市に接する須坂市、千曲市、飯綱町へ延びる路線など主に市域の東側に路線を持つ。このうち市域の松代を経由し須坂駅と千曲市の屋代駅を結ぶ路線は、平成24(2012)年に廃線となった長野電鉄屋代線の代替路線である。アルピコ交通バスは、長野駅を起点として戸隠や鬼無里、松代にそれぞれ向かう路線があり、それらを含め、主に市域の西側に路線を持っている。

長野市の主要交通網

3　歴史的背景

（１）旧石器時代～弥生時代

ア　長野盆地の黎明

長野市域の東部山地・西部山地に 10 か所の後期旧石器時代の遺跡が知られており、飯綱高原の上ケ屋遺跡では関東・中部地域、東北・北陸地域、近畿・瀬戸内地域それぞれの技術系譜をひく石器が出土しており、地域交流の様子がうかがえる。

縄文時代に入ると、後氷期の気候変動で豊かな落葉広葉樹林の森ができ、食糧になる堅果類が豊富になった。シカ・イノシシなどの中・小型動物が繁殖し、千曲川とその支流は淡水魚の宝庫で、シロザケやサクラマスも海から回帰して、重要な食糧源となった。市域南部の若穂地区保科の宮崎遺跡からはシカの角製の銛やサメの椎骨を利用した耳飾りが出土する。

この頃の平地は河川の流路が頻繁に変わる氾濫原であり常住が難しい場所であったが、千曲川河岸の地下４ｍからは縄文時代前期の集落が発見されており、縄文人が長野盆地を囲む山地から盆地の中州や自然堤防、扇状地に進出したことが確認できる。

イ　赤い土器のクニ

箱清水式土器（国鉄貨物基地遺跡）

平地での水田耕作は弥生時代中期後半に本格化し、千曲川の自然堤防上に集落を構え、後背湿地に水田を作る現在につながる原風景が成立した。稲作農耕は社会の仕組みそのものを大きく変えた。ムラ同士の抗争も生まれた。市域東南部の松代地区にある松原遺跡にみられる環濠集落は、弥生時代に集団間での抗争があったことを示している。

弥生後期の長野市域を特色づける土器に「箱清水式土器」と呼ばれる赤い土器がある。これは、壺・鉢・高坏型土器の表面をベンガラで赤く塗った土器で、千曲川・犀川流域に広く分布している。これらの地域では土器だけでなく鉄や銅で作られた釧（ブレスレッド）や管玉（ネックレス）といった装飾品を用い、単独埋葬といった共通する習俗を持つ文化圏を形成した。この文化圏は箱清水式土器の特徴から「赤い土器のクニ」と呼ばれる。

（２）古墳時代～平安時代

ア 大型前方後円墳と積石塚古墳

古墳時代前期から中期前半代にかけての長野では、大型前方後円墳が継続的に築造された。その代表的な古墳のひとつが篠ノ井地区の川柳将軍塚古墳であり、全長 93 mという傑出した規模と豊かな副葬品はこの地域を治める「王」が存在し、大和政権との緩やかな繋がりを持つ政治権力が形成されていたことを示している。古墳時代中期後半代になると、大型前方後円墳が姿を消し、代わりに石を積み上げて墳丘を造った積石塚古墳が群を為して造られるようになる。この積石塚古墳の集中度は日本列島でも群を抜き、千曲川右岸の松代地区には積石塚と合掌形石室を特徴とした総数 500 余基の大型群集墳・大室古墳群が形成される。

川柳将軍塚古墳出土の装飾品

大室 168 号墳（積石墳丘・合掌型石室）

大型前方後円墳から積石塚古墳へと様相が一変した古墳時代中期の長野には、古墳だけではなく手工業生産から生活様式に至るまで、技術刷新による大きな変化の波が押し寄せていた。中でも「馬」がこの時期に朝鮮半島を経由して導入され、陸上交通路の整備が進み、人・モノ・情報の移動が大きく変わる。さらに、馬に関わる技術体系は騎馬・乗馬・農耕馬という馬の使用から牧での飼育に至るまで文化総体（馬事文化）としてもたらされており、この受容が大和政権との関係性だけでなく、地域社会の在り方や役割までも一変させたことは想像に難くない。

イ シナノから信濃国（しなののくに）へ

大化の改新(645 年～650 年)以降の律令制のもと、天武（てんむ）・持統朝（じとうちょう）に全国を 60 余の「国」に分ける政策によってシナノは「科野国（しなののくに）」として成立し、中央から国司（こくし）が派遣され国を治めた。科野国は律令制で定められた行政区五畿七道（ごきしちどう）のうち東山道（とうさんどう）に区分され、越（こし）の蝦夷（えみし）に備えるための前線に位置していた。東山道はまた、畿内から陸奥国（むつのくに）に至る諸国の国府を結ぶ政治的、軍事的な道でもあり、市域にも北陸道へとつながる東山道の支道が設置された。

中央との関わりを示す出来事としては天武朝の頃、科野への遷都計画が立てられ、天武紀 13(684)年に三野王が科野に派遣されたことや、持統朝では天候不順が長く続いた持統紀５(691)年に「須波神」（諏訪）と「水内の神」（長野）に勅使を派遣させた記録が残されている。

その後和銅６(713)年の好字令により諸国の国名が縁起の良い二文字に改められ、国名が「信濃」へと変更された。国の下には郡が置かれ、信濃には 10 の郡が置かれた。これらの郡を治める郡司には、律令制以前国造としてシナノ国を治めていた豪族が金刺舎人や他田舎人と名乗り、在地支配を担った。10 の郡のうち北信濃には水内郡、埴科郡、更級郡、高井郡の４郡が置かれた。現在の長野市域はこれら４郡にまたがっている。

ウ 中世への胎動

８～９世紀は天候不順や自然災害など相続く災害により古代の水田が荒廃し、人々も逃散するなど、律令制の権力が揺らぐ時期であった。上信越自動車道の建設に伴う広域におよぶ発掘調査でも、現在の善光寺平の水田の下に過去の洪水で埋没した条里水田が見つかっている。

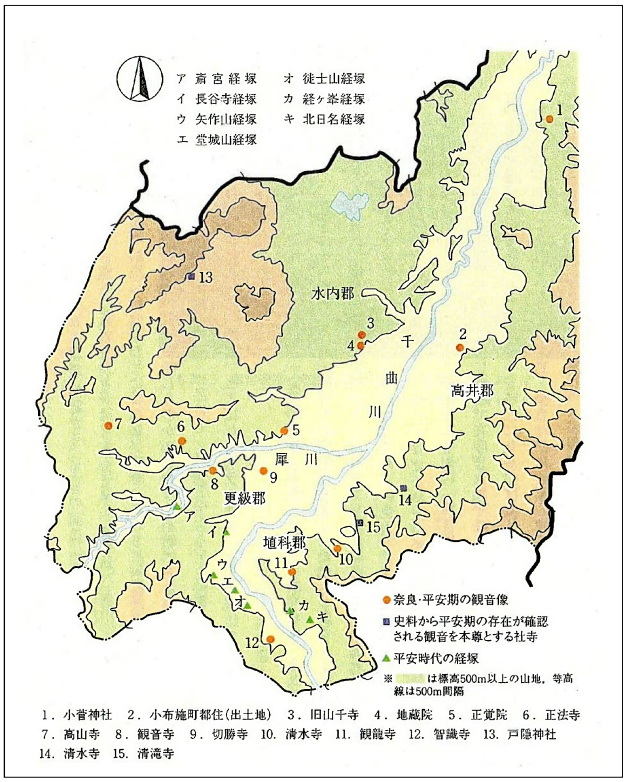
建設中のオリンピック開会式場と南宮遺跡

この時代、既存の権力が揺らぐ一方で富を蓄積させる新興の有力者が現れた。この頃長野盆地で進められた条里水田の再開発などは、新興の有力者層や郡司を国司の政庁（国衙）が組織して進めた事業であったと考えられている。篠ノ井東福寺地籍と川中島御厨地籍にわたる南宮遺跡からは千軒を超える住居や、溝により区画された集落構造が見つかっており、新興の有力者を中心とする集落であったと考えられる。

エ 古代の長野盆地の社寺

10 世紀頃になると全国的に摂関家藤原氏へ開発した土地を寄進しその土地の支配権を認めてもらう寄進地系荘園が増加する。市域でも千田荘、英多荘、芋河荘、太田荘などが成立した。現在、芹田地区の観音寺、地蔵院、安茂里地区の正覚院、千曲市の観龍寺、智識寺などには平安時代の観音像が残されている。これらは当時市域に存在していた荘園の開発に伴いその中心をなした人々によって勧進されたものと想定され、全国的な観音信仰の広がりのなかで長野盆地においてもその影響を受けたことがうかがえる。10 世紀後半以降は末法思想の影響で豊野の鷲寺や篠ノ井の長谷寺などで経塚が作られるなど、北信濃一帯に観音信仰や末法思想が広がっていった。

長野市の代表的な寺社である善光寺の名と戸隠神社（明治元年まで戸隠山顕光寺）の名が文献に現れるのは平安時代である。善光寺の名は10世紀に成立した『僧妙達蘇生注記』が初出とされる。戸隠山は平安初期には山岳信仰の霊地として注目され、文献では11世紀初め、歌人の能因法師がまとめた『能因歌枕』に信濃の歌枕の一つとして「とかくし」があげられており、この頃その存在が中央にも認知されていたことがわかる。



北信濃の古代観音像・経塚及び寺社分布図（『古代中世人の祈り』長野市立博物館 1997 より）

オ 武士の成立

平安時代末には荘園の荘官のなかで武力によって勢力を伸ばす者が現れた。市域においても更級郡村上御厨（坂城町）を拠点に、栗田郷（芹田地区）や千田荘に進出してきた村上氏や、高井郡井上郷（須坂市）を拠点に村山郷（柳原地区及び須坂市）に進出してきた井上氏、水内郡永池郷（古牧地区及び朝陽地区）や同郡和田郷（古牧地区）を中心に活動していた和田氏などがその代表であった。そうした時代にあって、藤原氏に代わり、武力によって中央での勢力を伸長したのが平氏である。平氏の繁栄は平清盛によって築かれたが、清盛の晩年になると、その繁栄にも綻びが出始めるようになる。後白河法皇の第二皇子でありながら不遇の身であった以仁王が、治承4（1180）年源氏方の武士に宛てて平家討伐の命令を出すと、それに呼応して挙兵する動きが各地で起きた。木曽にいた源義仲も同年9月、平家追討のために木曽で挙兵し、京を目指して北上した。義仲軍は市域にも進出し、市原合戦（善光寺合戦）で平氏方の笠原頼直を討ち、翌年の養和元（1181）年6月には、越後の城資職を篠ノ井横田の地で破った（横田河原の戦い）。横田河原の戦いでは地元の井上氏や村上氏も義仲軍に従軍した。

（３）鎌倉時代～戦国時代

ア 善光寺門前町の成立と発展

善光寺は治承３（1179）年に焼失したが、源平合戦に勝利した源頼朝の命によって12年後の建久２（1191）年に再建された。鎌倉幕府の主導による善光寺再建はその後、有力御家人を檀那とした新善光寺の建立や善光寺仏の模造の流行

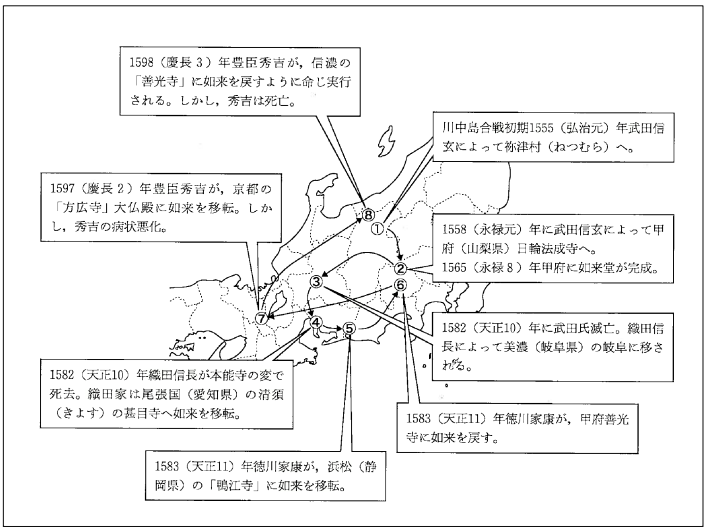
を呼び、鎌倉時代後期には善光寺信仰は全国各地へ広がった。それに伴って善光寺への参詣路も整備された。浄土教の教えを弘めた僧一遍(1234-1289)の生涯を描いた『一遍聖絵』(鎌倉時代後半成立）には、三国伝来の如来信仰の聖地として当時の善光寺や門前の賑わいが余すところなく描かれている。この時代に善光寺に参詣したことが記録からわかる人物には源頼朝をはじめとして一遍、久我雅忠の娘二条、他阿真教などがおり、伝承としては親鸞の名も伝えられている。

イ 戦乱の時代

川中島甲越対陣図（長野市立博物館蔵）

元弘３(1333)年鎌倉幕府が滅亡すると、市域はたびたび戦場となった。建武２(1335)年に北条高時の遺児、北条時行が諏訪氏を頼って挙兵すると、八幡河原、篠井河原、四宮河原で信濃国守護小笠原貞宗方と戦いこれを退けた。勢いに乗った時行軍は鎌倉まで進軍し、一時的に鎌倉を支配するが、その後足利尊氏軍により鎌倉を追われた（中先代の乱)。

室町時代には、応永６(1399)年幕府から信濃国守護に任じられ、翌年信濃国に入国した小笠原長秀の領国支配に反発した在地の国人領主らが、一揆を結び反抗し篠ノ井塩崎・二ツ柳周辺を戦場に長秀軍と戦い、これを敗退させた（大塔合戦)。



善光寺如来遷座の図

戦国時代になると北信濃は領地争奪の場となる。特に武田と上杉による川中島の合戦は北信濃一帯を戦場に、複数回にわたって戦いが繰り広げられた。この合戦により武田・上杉両軍によって善光寺の本尊や仏具が持ち去られ、本尊を守っていた衆徒までも連れ去られたため門前町が衰退するなど、この地に大きな影響を与えた。善光寺如来は弘治元(1555)年に武田方によって善光寺から移され、以来慶長３(1598)年に豊臣秀吉の命により京都方

広寺から善光寺に戻されるまでの 43 年間ものあいだ、そのときどきの権力者の意向によって流転を余儀なくされた。

なお、川中島の合戦の際、武田方の拠点として松代に造られた海津城は、江戸時代に入ると信濃国で最大の領国を治めた松代藩の中核として発展していく。

（４）江戸時代

ア 交通運輸

江戸時代になると主要五街道（東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道）に次ぐ脇街道として北国街道が整備された。北国街道は追分宿（軽井沢町）で中山道から分岐し、矢代宿（千曲市）を過ぎて二つに分かれる。一つは、丹波島宿から善光寺宿、牟礼宿（飯綱町）に至るルート、もう一つは、松代城下町を通り、福島宿（須坂市）、長沼宿、牟礼宿に向かうルートであった。長沼宿と松代城を結ぶ後者は松代道とも呼ばれ、戦国時代から江戸時代初期における主要ルートであったが、次第に善光寺町を通るルートが主となり、松代道は犀川の洪水による舟留めの際の迂回路として利用された。北国街道の発展はそれに接続する大笹街道や三原道、峰街道といった道の発展も促した。また江戸時代後半には千曲川や犀川で舟運が開通し、陸上交通とともに物流の一翼を担った。

一方、江戸時代に「山中」と呼ばれ、麻や和紙の産地となった長野盆地の西部中山間地域では、これらの流通の拠点として早くも慶長 12(1607)年に新町（信州新町）に九斎市の開設が、天和３(1683)年に鬼無里に六斎市の開設が許可され、それぞれ物資集散の要所として栄えた。新町は松本と善光寺を結ぶ主要地となり、犀川に架かる久米路橋は松本藩領へと続く主要な道として口留番所が置かれた。さらに幕末には松本～信州新町間に犀川通船が開設され、物流の大動脈となった。鬼無里は、戸隠、高府、安曇野に通ずる道の分岐点に位置していたため、人と物とが頻繁に行き交った。白馬から善光寺へ向かう道沿いに建つ鬼無里土倉の文珠堂には、往時の賑わいを伝えるものとして、幕末から明治にかけてこの道を行き来した人々の落書きが残されている。

イ 真田十万石の城下町松代

江戸時代、長野市域の大半は松代藩領で占められ、残る地に幕府領、善光寺や戸隠山といった寺社、飯山藩、須坂藩、上田藩、塩崎知行所などの所領地が入り混じる形で存在していた。

松代藩の政庁である松代城は、川中島の戦いの際、武田信玄が築いた海津城がそのはじまりとされる。その後、領主の移り変わりと共に、城将・城代などが入れ替わり、それ

に伴い城下町も整備され、北信濃支配の拠点として重要な役割を担うようになった。

元和8(1622)年、真田信之が上田から松代へ移封され、松代藩真田家の初代藩主となると、既に形作られつつあった松代城下町に上田から真田家ゆかりの寺社を移して城下に組み込み、町を再編成した。以来、真田家は明治の廃藩まで10代、約250年にわたり、松代藩主をつとめた。真田家は代々学芸を好み、領民を感化した。そうした気風によって幕末から明治初期には、時代をリードした佐久間象山や長谷川昭道ら多才な人物が輩出した。

松代城下絵図
（長野市立博物館蔵）

ウ　善光寺の再建と善光寺町の繁栄

如来像が戻った善光寺は、江戸幕府より寺領千石の寄進を受け、次第に復興していくが、本堂が幾度か火災で焼失するなど災難が重なった。元禄５(1692)年には本格的な本堂再建計画が始まり、資金を調達するため京・大坂・江戸の三都で出開帳を催し、工事に際しては本堂の類焼を避けるため再建地を北へ移し、現在地に新敷地を造成した。しかし元禄13(1700)年の火災により、建築中の本堂も集積した用材とともに灰燼に帰した。これをうけて江戸幕府は再建を援助すべく、善光寺に全国を回る回国開帳を許可し、松代藩に造営奉行を命じた。５年に及ぶ回国開帳は成功し、宝永４(1707)年に現在の本堂が落成した。この回国開帳は善光寺の信仰を全国に広めることにもなった。

回国開帳を契機に参詣者が増大すると、信濃へ入る道は善光寺道と呼ばれ、路傍には善光寺を指し示す道標が建てられた。善光寺の各院坊では信者を宿泊させ世話をするとともに、全国各地に善光寺講が組織され、門前は全国から来る参詣客を迎えることで繁栄をみせた。

善光寺宿駅繁花茶店の図（善光寺道名所図）

全国を巡る回国開帳は元禄14(1701)年から宝永３(1703)年の第１回を契機として、延享４(1747)年～寛延元(1748)年、安永９(1780)年～天明２(1782)年、寛政６(1794)年～寛政10(1798)年の４回行われ、これらの出開帳で得られた資金を基に境内の整備が進められた。

エ 戸隠神社と戸隠信仰

嘉祥２(849)年に学門行者によって開山されたとされる顕光寺（現在の戸隠神社）は、本院、中院、宝光院からなる天台宗寺院で、江戸時代以前から多くの修験僧が修行に訪れる山岳信仰の聖地として栄えた。江戸時代に入ると戸隠の地主神である九頭龍権現が農業神として庶民の信仰を集めた。各院の衆徒は各地に講を組織し参詣者を迎え、善光寺と同様に宿泊と参拝の世話をした。また戸隠の衆徒が各地に出来た講に出向いて戸隠信仰を広めていった。明治時代に入ると神仏分離令によって顕光寺の僧は還俗して神職となり現在の奥社、中社、宝光社、九頭龍社、火之御子社の五社からなる神社組織となった。

午王宝印に描かれた九頭竜権現

オ 善光寺木綿と山中麻

江戸時代の市域の代表的な作物に木綿と麻があった。木綿は 18 世紀に入って市域の平坦部で作られるようになる。主に水田を利用して栽培され、最盛期には水田の３～４割を木綿栽培が占めるような状況であった。木綿は布の原料として、善光寺門前町にたてられた木綿市で取り引きされ、最盛期には善光寺木綿の名で各地に移出された。しかし近代に入り海外との交易が始まるとインドから入ってくる木綿に押され、急速に衰退していった。

麻は江戸時代、松代藩の支配領域として「山中」の名で設定された西部中山間地で盛んに栽培されたので、山中麻と呼ばれた。木綿が普及するまで衣服の材料として用いられてきた麻は、領主にとって重要な収入源として認識されており、江戸時代初期には他領への移出の制限や、領主側による定額での買占めなどが行われた。その後農家側が麻運上を納めることで、自由売買が認められるようになったが他領への売買は依然許可制であった。一般に近世中期以降、木綿衣料の普及により麻生産は減少していくが、山中麻の場合、畳糸や蚊帳地といった商品に加工したものを移出していたので特産化し、その生産は昭和 30 年代まで続いた。

カ 近世長野の庶民教育と文化

江戸時代の信濃国における寺子屋や私塾の普及率は全国一といわれ、各地の

寺子屋では手習い、読み書きにはじまり、商業の盛んな地域では算盤も教えられた。市域には寺子屋師匠を顕彰し供養するため生徒たちによって建てられた筆塚があるが、その数は 2,000 を超える。

江戸時代後期、経済が発展すると知識人の交流も盛んとなり、俳諧や、謡、挿花などの文化的活動が広まった。特に俳諧は北信濃随一の商都として人と情報の交流の場でもあった善光寺門前町を中心に、在野の俳諧師によって市域中に広まった。吉田出身の茂呂何丸や信濃町柏原村出身の小林一茶が活躍し、市域を含め北信濃の俳諧師や門人たちと積極的に交流した。長沼には熱心な一茶の門人が多くおり、彼らは長沼十哲と呼ばれた。現在でも市域の神社仏閣には当時奉納された俳額が多く残されている。

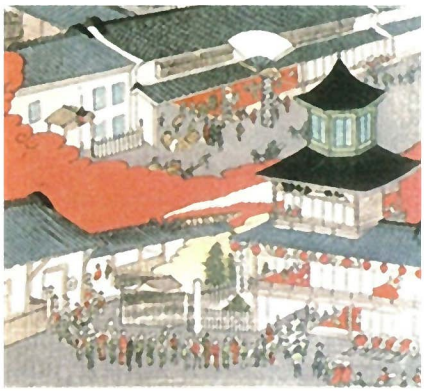
キ 善光寺地震

地震後世俗語之種（真田宝物館蔵）

江戸時代末の弘化４(1847)年３月に北信濃を襲った地震はマグニチュード 7.4 と推定され、甚大な被害をもたらした。このとき善光寺では御開帳が行われており、全国から多数の参詣客が集まっていた。参詣客も、地震によって倒壊する家屋の下敷きになったり、各所で発生した火災に巻き込まれ、数千人の犠牲者が出た。また地震により信更村涌池にあった虚空蔵山が崩れて犀川を堰き止め巨大な湖を作った。この湖は地震発生から 20 日後に決壊し、長野盆地一帯の人家を押し流す大洪水をひき起こした。その痕跡は各地に作られた洪水による犠牲者供養の石碑に見ることができる。また上松の昌禅寺には、洪水によって押し流された巨大な石塊から作った地蔵菩薩が祀られている。

（５）明治時代～昭和 20 年

ア 長野の近代化


当時の長野停車場
（扇屋引札 長野市立博物館蔵）

明治４(1871)年６月、高井郡中野町（現中野市）にあった中野県庁を長野村の内、善光寺町へ移し「長野県」と改称する太政官布告が発せられ、７月、仮庁舎となった西方寺で執務が開始された。

同月、廃藩置県によって松代藩は松代県となるが、11 月、佐久郡、小県郡、埴科郡、更級郡、高井郡、水内郡にあった７県すべてが長野県に編入された。その後明治９(1876)年には筑摩県を廃し筑摩

郡、安曇郡、諏訪郡、伊那郡を合併し、旧信濃国 10 郡すべてが長野県となった。この間、善光寺が所在する長野村は、「県都」として市街の近代化が急速に進められた。明治７(1874)年には長野村が長野町となり、明治 22(1889)年の町村制施行では周辺の南長野町、西長野町、鶴賀町、茂菅村を合併し、明治 30(1897)年には県下初の市制を施行して長野市となった。

明治 21(1888)年に鉄道が開通すると貨物輸送量が急速に増加し、商品流通が活発となり、商工業が発展し近代的市街地が形成された。大規模敷地を要する官庁や文教施設は市街地縁辺部に設置され、市街地との連絡道路が建設されることで、新しい町が生まれ市街地が拡大した。大正 12(1923)年には三輪村・芹田村・吉田町・古牧村を編入合併してさらに市域を広めた。

イ 製糸業の隆盛と衰退

近代に入り日本の生糸が海外で好評を博すと、国も富国策として繊維産業の発展に力を入れたため、市域でも蚕を飼う養蚕農家が急増した。明治７(1874)年には旧松代藩士大里忠一郎らが、松代町西条に民間資本による器械製糸場を設立した（西条村製糸場、後に六工社と改称)。六工社には官営の富岡製糸場で工女として働き、蒸気器械製糸技術を学んだ和田（横田）英ら十数名が技術指導者として参画した。

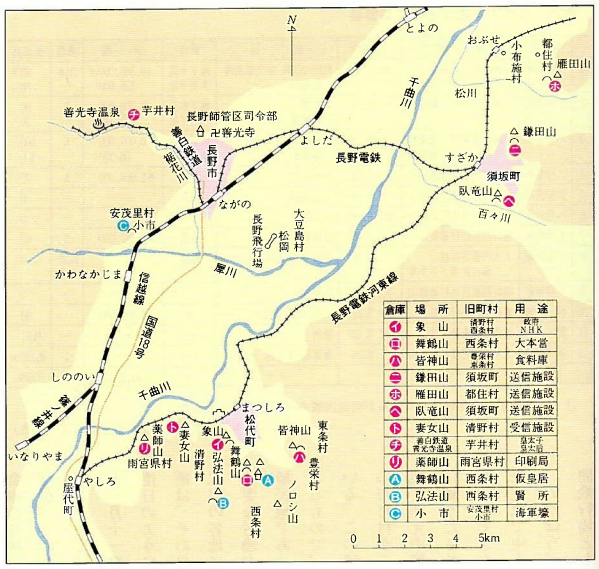
昭和２(1927)年、ニューヨークのウォール街での株価の大暴落に端を発した世界恐慌は日本にも及び、昭和５(1930)年に主要輸出品だった生糸の価格が大暴落する昭和恐慌が始まった。ほとんどの農家が養蚕を行い、製糸工場で働いていた女工も多かった市域の影響は甚大であった。これに対し長野市では失業救済事業として、大峰山麓の展望道路、市営球場、市民プールの修理増設などを行う雇用対策を講じた。昭和７(1932)年に円相場が下落し円安となると、日本は輸出を急増させたため景気が急速に回復したが、製糸業は海外での化学繊維の普及により、少しずつ衰退していった。

ウ 太平洋戦争下の長野

昭和 16(1941)年の真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は、年を追うごとに日本側の劣勢となっていった。敗色が濃厚になる昭和 19(1944)年になると天皇と直属の最高作戦指導機関の大本営を東京から長野へ移す計画が陸軍を中心に立てられ、同年 10 月に松代の象山、舞鶴山、皆神山に巨大な地下壕を設ける移転工事が始まった。翌年８月 15 日、日本の降伏によって戦争が終結したため、工事は中止されたが、本体の８割方は完成していた。工事の主要な労働力は勤労動員、学徒動員、朝鮮労働者らが担ったとされる。

昭和 20(1945)年アメリカ軍による本土爆撃も各地で激しさを増した。長野市

は終戦日２日前の８月 13 日の午前６時 50 分頃から午後３時 50 分頃まで６回にわたって機銃掃射や爆撃をうけた。この空襲では長野飛行場、国鉄長野駅機関区などの軍事・公共施設のほか長野飛行場の近くにあった大豆島国民学校も攻撃の対象となった。このときの空襲による死者は 47 人とされている。



倉庫	場所	旧町村	用途
イ	象山	清野村 西条村	放送 NHK
ロ	舞鶴山	西条村	大本営
ハ	苅神山	豊栄村 東条村	食料庫
ニ	鎌田山	須坂町	送信施設
ホ	雁田山	都住村	送信施設
ヘ	臥竜山	須坂町	送信施設
ト	妻女山	清野村	受信施設
チ	善光寺温泉	芋井村	皇太子 皇太后
リ	薬師山	雨宮県村	印刷局
A	舞鶴山	西条村	仮皇居
B	弘法山	西条村	官 所
C	小市	安茂里村 小市	海軍壕

松代大本営関係施設（『松代大本営 歴史の証言』）

(6)昭和 20 年～現在

ア ４度の市町村合併

昭和 28(1953)年の町村合併促進法により、翌 29(1954)年に古里・長沼・柳原・朝陽・大豆島・安茂里・小田切・芋井・浅川・若槻の周辺 10 か村が長野市に編入合併した。昭和 37(1962)年には広域都市の設置を目指して、長野市が近隣市町村に合併を呼びかけ、同 41(1966)年に篠ノ井市・松代町・川中島町・若穂町・更北町・信更村・七二会村との大合併が成立した。平成に入って地方分権の推進や行政の効率化を目的として国が打ち出した「平成の大合併」により、平成 17(2005)年に豊野町・戸隠村・鬼無里村・大岡村が、平成 22(2010)年に信州新町・中条村が長野市に編入合併した。

イ 商工業の発達と農山村の過疎化

戦後の長野市は、高度経済成長期の中で食料品・印刷・電気・機械業を中心に発展を遂げた。特に昭和 36（1961）年に善光寺の御開帳と同時開催された長野産業文化博覧会を契機に、長野－上野間を４時間で結ぶ急行列車「志賀」号の運転が始まり、長野駅の増改築及び駅前広場の整備や、第五地区権堂町商店街の全面アーケード化が行われ、本市の戦後経済の復興と成長が加速した。

商工業化の進行に伴い、農山村部では昭和 30 年代半ばから長男や世帯主までが勤めに出る傾向が強まり、昭和 40 年代以降もそれは変わらず現在まで農業人口の減少と高齢化は進行中である。農業人口の減少によって増加した休耕田は、標高が高く雨量が少ない本市の自然環境と生産性の高さから、りんごを代表とする果樹栽培地へと転作されていった。現在も長沼地区や篠ノ井地区、川中島地区、若穂地区、豊野地区などで、りんご、ももを中心に盛んに果樹栽培が行われている。

ウ 戦後の自然災害

昭和40(1965)年から松代で微小の地震が日に何度も起きる群発地震が発生、昭和44(1969)年に終息するまで地震総回数は64万8,000回を数えた。昭和60(1985)年には地附山(じづきやま)の南東斜面で大規模な地すべりが発生し、26人の犠牲者と多くの住宅被害を出した。台風による犀川や千曲川の氾濫、堤防決壊は戦後何度となく起こり、そのたびに農地や家屋が被害に遭った。特に令和元(2019)年には長沼地区や豊野地区を中心にかつて例を見ないほどの多くの被害が出たが、住民の努力と多くのボランティアの尽力で、生活は再建され、地域の復興に向けた取組みが進められている。なお、水損した歴史資料は長野市立博物館の文化財レスキュー活動により一部は所有者に返却されたが、現在でも博物館で、残る資料の安定化作業が続けられている。

エ 高度経済成長期のレジャー・観光地開発

戦後、観光立市を目指した長野市は、昭和35(1960) 年に善光寺を核に、周辺の大峰山・地附山、飯綱高原一帯を観光地として開発しようとする観光開発案を策定し、昭和37(1962) 年に大峰山に天守閣型展望台を、またその前年には地附山山頂までのロープウェーを設置した。地附山山頂には遊園地やゴルフ場、大展望浴場をもつ善光寺ヘルスセンターが開館し、行楽地として賑わった。しかし、昭和39(1964)年に長野市街地と戸隠高原を結ぶ戸隠有料道路（通称戸隠バードライン）が開通すると、大峰山や地附山は通過地となり、次第に利用者が減少した。

戸隠神社の表参道が通る飯綱高原はキノコ狩りやハイキングなどの行楽地として戦前より市民に親しまれていたが、昭和30年代頃から本格的に観光開発が行われ、夏はキャンプ、冬はスキー、スケートができる観光地・避暑地として発展していった。戸隠地区では昭和38(1963)年の村営スキー場開設、翌年の戸隠バードライン開通により、多くのスキー客や避暑を求める観光客が急増した。そのため同地区では昭和40年代以降、民宿業を営む家が増加した。戸隠地区の観光客数は、昭和50年代をピークにスキーブームの収束もあって減少したが、神秘的な佇まいを残す戸隠神社奥社や、近世以来の宗教集落の景観を残す町並み、日本三大そばの一つである戸隠そばといった歴史文化的な観光資源を活かし、現在でも善光寺に次ぐ観光地として賑わいを見せている。

オ 高速道路と長野新幹線の開通

昭和40年代からの自動車普及に伴い、全国各地で自動車道の建設が行われるようになった。長野では昭和48(1973)年に決定した岡谷市(おかやし)から長野市間の自動車道整備計画により、平成５(1993)年に長野自動車道・上信越自動車道が開通

した。新幹線は北陸新幹線の基本計画がすでに昭和 47(1972)年に決定されていたが、なかなか着工されなかった。しかし、冬季オリンピックが平成 10(1998)年に開催されることが決まり、平成 9(1997)年に長野・東京間を最短 1 時間 19 分で結ぶ長野新幹線が開業した。その後平成 27(2015)年に線路が金沢まで延伸し、北陸新幹線と名称を変更している。

長野自動車道・上信越自動車道開通式

カ 冬季オリンピック・パラリンピックの開催

平成 10(1998)年に開催されたオリンピック冬季競技大会・パラリンピック冬季競技大会は、長野市を中心に５市町村（パラリンピックは４市町村）が会場となった。長野市ではオリンピック・パラリンピックの開催により競技施設が充実するとともに、各国から来る外国人との交流も盛んになった。特にこのときに始められた各国の選手と長野市内の小学校の児童が交流する「一校一国運動」は、後のオリンピック開催国にも引き継がれ、長野冬季オリンピック・パラリンピック最大のレガシーとなっている。

このような国際的なイベント開催を経た長野市では平成 17(2005)年にはスペシャルオリンピックス冬季大会が開催されるなど、国際会議観光都市として、様々なコンベンションが誘致・開催されている。